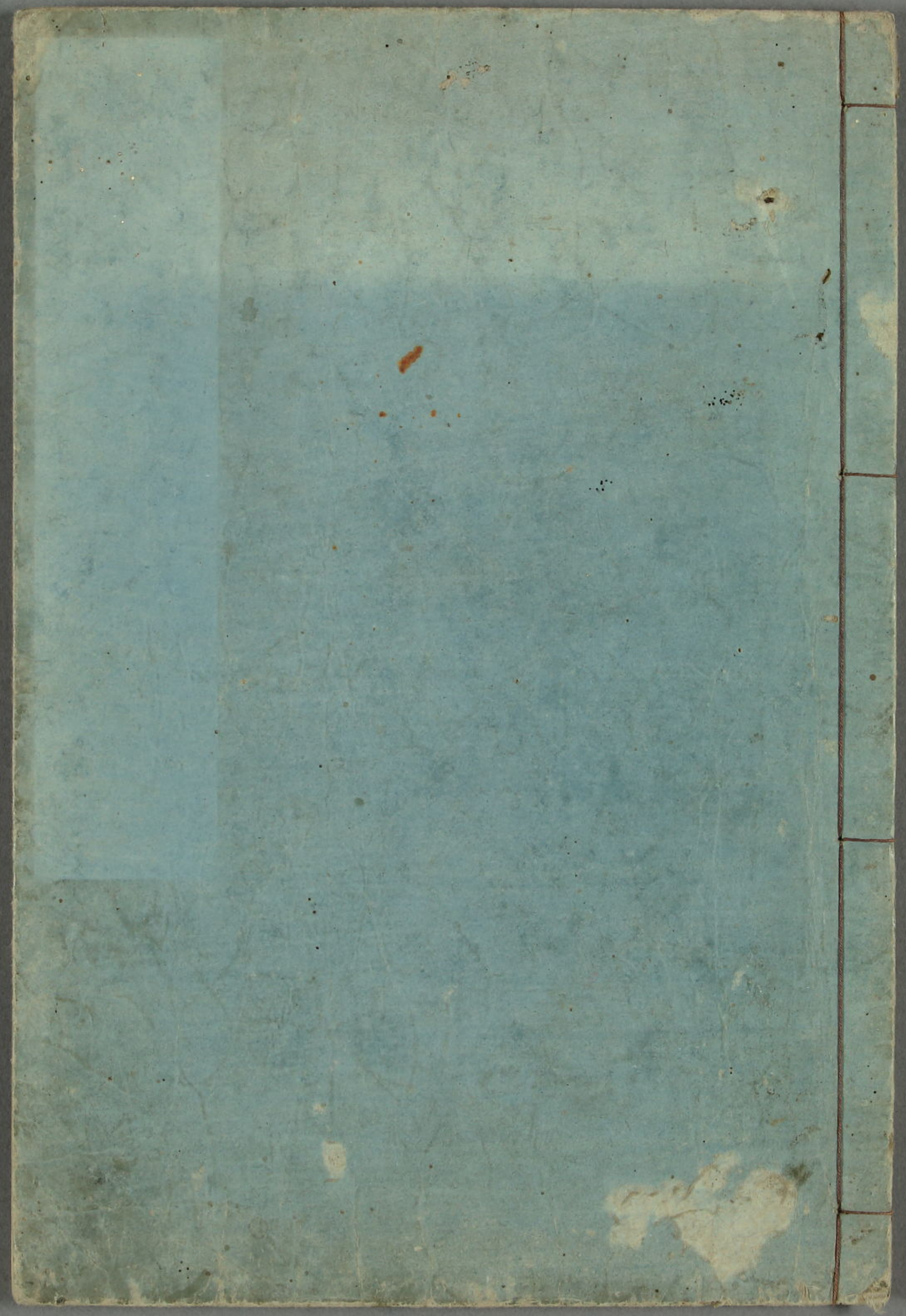

和歌秘書

序

[illegible]初学の人を勉こ
集化の事九七十余編を撰の
中より毋七部撰出し先師
逮登[illegible]口述とをいて此書の
きゝひゝ解るゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]を[illegible]記[illegible]

ゑのゝ笑あくてきたりふ拙毫く
圭肆乃ゝ[illegible]めて反魂と飛ぬ
つ人等ゝ[illegible]をかもや紀再梓よ
ちまゝめ師ゝ小駿乃情を補ふと
志ゐい婦

不白軒
吐月

安永四乙未春三月

寛保二壬戌正月十六日

更衣口述
蓼太識

小庭の梅やゝ不ゝひ仏縁の日さしもうゝと
巨燈毋居眠かゝ初紙しゝ機嫌ゝ
一同云　冬の日

粗白風其勇を行無ゝ細ゝる式
此粗白の二字我人冬の日一部其主味ゝ
やゝいゝゝ少在なるゝや

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二字をもて集をよし出しさは又面白きなり

一 又同 日集

あるしはひんなるをもてなし　虚来

田中なるこまんの柳　落るこの

はこまんの柳はあるをよ　[illegible]

若芝は伊勢山田のあり　[illegible]

こまんといふ女うみたちの勇よあるを　[illegible]

うらを名をもて辞世をおして身を投さその

下の柳をこまん柳といふ　[illegible]

論義して[illegible]事く俳諧といふものはよてのみ

ようやさはありとなかふ雑事の中うさひ

しをおりしを思ふ見えをの[illegible]をうを極を

あるものくそを乞食袋にも名付うり文屋人
むつかしき時をうり紙白くと稱ぶ人ハ志摩事と
義の云ふ事ふるも文屋よ春る時を俳諧を云ふよ
とハおうしあるものなりしも立てよい白をと思を
屋情しそ井こ出ぬものなりて立てとそ云
あるべし事日の人情ようこ法るの俳諧こ

一又同　日集

盗人の記忘れ松の吹折　命

きそ宗祇の名を付し水

若浦の東山ふ宗祇水ありしやうにハ云ハ
又宗祇ものを盗人の記忘の松ふ付出しこ示を
只是ハそのの方ふ態板れ和尚の松宗祇のあり
對付なり今時れ人のせあ附方なり和宗祇水と
いふハ宗祇忘郡上郡山田庄文瀬川のほとりふあ
ハ泉ハ東地ふ云宗祇法師ふ古今傳文字てこの
所て送ひ和歌を添せ立しこ所ハ中ふ字
事あるべしこそ云ハ宗祇又白雲水おしくも云
ふ宗祇を白雲といふこそ西行雲

とくの清水ありて四季ちやかやとけるが
名人八行のうもちうゝ茶碗ゝ水さゝ名所の四跡
のこりなるゝよ俳諧の白ゝても古人の骨折ゝ拾ゝ
今又かくのごとくにけ身八ゝふちやなの身八ゝふちやし
人ゝ拾ぬかり近比点元の勝負をゝ年ゝ飛者又
ちやり宗匠の白ゝても骨折ゝ絵ゝ骨折ゝ八
今人の口ゝ一白も独らだゝ自ゝ見ゝ法ゝも矣ゝ
絵ゝうり選集ゝまゝ上ゝ年ゝたゝうりて表実
風流ゝ拾ゝ人のかいるゝよゝ情ゝやう尚ゝ二三度

一同　月集

為賊八名ひとのゝ名れうゝ
ひ白ゝ上ゝ原ゝ社ゝうゝや
昔ゝ古ゝあるゝうゝ名ゝ八富ゝ云神ゝりいうゝ
古人の白ゝ名ゝ八ゝて一ゝゝ故事の古ゝのゝうゝ八
為一ト紀家悪トといふゝ悪の甲をとゞし
裏ゝり大ゝとけひゞ彼のこゝあるゝ離の新口ゝ
ゝ八行の卦ゝ易ゝ八ゝよりてゝゝるけれこゝゝ
ふゝゝ人ゝゝ為賊八富ゝ云ふいゝゝ拾ゝ奇ゝ

おりしかのうり恋の下紐とへていはぬもまろが身の行衆

同集

なつ草さの縋もうけし時る

秋ゑ一年りつつ表ろ

師云是ハ後世曲言の句本と縋と云字をとりて

秋の表ゑさ法を附うり水一年よ漏刻成

りさせうのありさく草よみを法けゑよ

月ゑとるもけあ月ひといつや我ゑ冬の

白よ牡丹を付う事のおゑつる牡丹ハ冬もろ

ものゑてさして面季をことるゑも及ぬけ

やうゑ事も打ゑさ面白ものゑも使うの

只ゑとなしい事う面うゑ和こ義の俳諧もそや

炭俵ありうハけ稗の蝿ゑ分白ハゑえねと深ゑの

ゑ事ゑり

同十七日夜話　同集

初雪のこしも袴ゑてうくる

雪てけまさえる行きうほの食

世間ゑ人ゑ月ゑる様の拾ゑて

うつろふけしてとまる事もさまり
春の月神の鼓やあるすらん
槻花をたをる　貞徳乃宮

一　同じおりてハこの事續ハ世俗もてうつるなり
若ハ月いつる彼牡丹をたをる事ハ同事なり
春ハ秋を分出し月ハ常住不変のものなり
よりて春を分ちこの今も月のあるハ
分るゆへなりとも

師云之紀くといふ人ハあるとて何ゆへなるとも
ふ事をもとくとくハまねるなりおほ
きくて奇集詩集ともいふ時代と古人乃詩
ハをんて概ハ此ものなる歌の俳諧もこの
日ハ春の日ハ春ハ猿蓑ハ
熟一般猿蓑ハ
猿蓑ハ
此ハ猿蓑ハ

七瀧の出来ちやといふを聞てければ成るほどなりを
曲尺ふしく垂てく時くの風流ハどのやうなりと
やるらんなりそれを今時の若人ハえん孫時代
ちやの良事ちやのと申もれあいまとさう
いふてハ世上を古ちをまをふるハえとかいう
ぬなり年寄同士ハ昔むかしさよ物勝負を
論ずるとハえとなり

同集

恵せぬきぬ〻さ源海を結

秋輝の虚カラ声ハ声ハつのさハ
師云ハ水面白身ハ虚ハ声ハ水源海ハ
糸得ぬてハ中ハ声ハ声ハ工夫なり
十八日　西陣人来る又ハ其の日紙開く

同

佛吟ハ海ハ
孫ハ花見次郎と作る
此二句いう
若殿ハ何浦ハ中ハ殿の大魚上りハ

恵心僧都の出世仏像を彼井より取出せる
ものゝ由なり又花見次郎次郎とハ日向国の何
次郎とかいふものゝ子孫なり
法華堂に花見を習しく名を去る事
あり去る頃名ハいせいで花見次郎くとゝ
ものゝ子孫なり花見次郎ハ名のおりしかるべき
ものゝ孫なり田舎よりいふものなり

同集

萩織かさを市にて振る

加茂川や加茂明神祭 微近く

一同加茂明神祭いつくのものや
答ハ京ハ上加茂の川より稲荷社祠あり此
神の好せものにて毒あり こゝを加茂を
持るゆ一本も持るゆ そこゝ比祭式
加茂明神祭と云ハ しゝ明神の社なる云
所云ハ一集の如所也

新庚申塔乃ハ ほくく並ひ居て
冬の朝日ハ ひかり出るなり

此紙ハ余情紙毫よりしるしてをれ日といふ
紙号も見うる附くさ抜ちやけふ紙ハ変も此
白を味へてをるる能く

櫻橋山家の船を寄せ墨陰
花藤る岸に咲うと

一同此度三ハ玉まもぬける玄の柳うといふ奇の
あるを知や
言さうしるるて知し先度三の主味を海
さんと思りて留をとくと時あけ柳を引金

刃も同ふ一も趣し柳ふ類も海ぬるものなり

一同左山枝形といふるハいう
言見ハ白法と先ハ平白よ絵ぬ仕方と改長家紙
家紙接世のためよ本一重ものこ柳百をうり
ものなりいれて家さすこ見る程をそこ
出ちあて工夫あるこ
一同改長ハ誰人ぞや
言島山龍清つ智屋ちり
根よりくるるこの柳ら花さうり　改長

名の古巣を雲かくれて　宗伊
奥山を志をもとりはなれぬ　宗祇

、

雲ゝ声なるこゝろの雲葉哉　長
雲井の雲れゝりゝふこゝろ　祇
雲ゝ雲ゝいとゆふ雲の形さ日み　伊
雲分て月ゝ雲しぬるゝ　長
ゝ紙ゝゝふさゝふ御の花　伊

山ゝゝゝ末の下やゝゝハ時やゝて　祇

、

やゝ紀世ゝ靡くゝ行の若葉哉　長
投ゝ有ゝゝゝ川ゝ山ゝ　祇
岩ゝ戸ゝゝく多鶯や明らん　伊

、

紀ゝ世紀葉ゝゝ末ゝ清ゝ　長
加ゝる法ゝ有ゝ　祇
出ゝ日ゝ月ハ白雪の旅乃元　伊

文政二年ノ四月ニ出版ナリ

一同　同集

そぞろなる牛の臨ら海辺

かうかう鳴くや

言いうあそかうかう法之鐘に白日と今時なるハ

てるとの味もあくこと遠さちとして金比

はくてかくれなくなること不思議

やくなり月ハ月でハ切なり

同廿一日義及一書る子年始入来落書入来御

法あり

書云春の日々冬の日々見ぬ様別家ハ見ぬ

師云既往の日ハ蓬門の男業と春の日又この

附句義の多をもかくハ書る海を

あの勢ひなり

一蕉同　春の日

咲かれ菊まハおしき白雪て

秋の和名年　かるる　順

ひ句いう

答源順ゝ和名抄の無元

一　又問

[illegible]の毋よりあるゝあるゝ
[illegible]の文よりハ唐猫ハて
答山門の児は髮を唐猫ゝ結ひ口の文は星乃
拍女を[illegible]ゝ又唐猫ハ結ぶ事やり
首の[illegible]ゝいふなり元と仕業
[illegible]
師そこよる知さこ集を[illegible]

かゝしこのゝ[illegible]郷語なり

一　問　ひさこ集

[illegible]の甲斐ゝ[illegible]時ハ注も[illegible]
ひい牛　蠏ゝ牛　風のふく吉
百姓は本[illegible]結ひ[illegible]
ひ[illegible]白銀ハ銭士よ[illegible]
[illegible]のさ[illegible]
答[illegible]
[illegible]の甲を[illegible]

風の吹きて枯果てる海くそうそう黄ばみ菊季を
定てみせけるてとハいふまでもなく古人の骨折ハ
仇なるのまにかすす

新よさを泄松落て所うろ
月花もなくて海のむかうかな

芭ハ雑なり

同廿三日夏至蓮華枝入東水吉入東雑後雑後歩
文ていかり夕方迫蓮華ていの〻地集を取て附合為
師云芭蕉門の俳諧も冬の日吉丸日〻一練なて

潮地集より至て古風の祢ぎをとりて蓮華さらのこ
さらとかうう一二ケ所ハ芭蕉も悔ま一附合をいて
事就人の白なり

理をなる迄さる秋乃夕くれ
瓢箪のおろさまさ石牛なり
此里よ古き去蕉の名を清之
見詰なるせぬ面れあけかの
路の白ハ理をなる迄ていふ所の結をなて
なて瓢箪の大さ石牛といひ坂の白ハ古き

玄義の名を伝へさうらふ是をもつてあるなり
かりそめ一句よりかなしさをうけ其事いうなる
集まもるものかうそうを是を悔是一義の深
切を思ふへし今時業を作り出て風雅のあさ
集のまこと是ぬハたちり

同集

深更の篇まさに淡黄よ秋の蓄
花と伝しうふ第れ一瓶

一同じ白花とおもへ一心花用るるや

言成花さうこうす花ハ黄落ちり花ハ揚こ
あること又揚よりさるるあるに

積雪白の花

糸揚そうこ一ちい身咲よあり
春ハ三月なりけりのそう
しけ白の花を見へし名人の業こそれを今
時口い三盛の所へ花を持せされ又峯白の曙て
花よ取のこ絵ハしいるなしいこ在るなり
さうこうこ事よあるす先師秘義の事こ

いつて正花海人せ中一一

一 夢問 同集

一 はるとも云ふ紀花なるのゑ孫なり

はるの河辺より伊賀国花垣庄はそのうち奈良の

八重櫻の料 毋身らを遣はしあるいつまで

はれ年より

言武書より 上東門院南殿の櫻を掃庭ようし

う〳〵殿ん〳〵と云ふ毋無福なれ猶清涼殿の樹に我なの

昊末なりたるひるる命より背ともいはずと念

ひるとて感させ給ひて伊賀国余理庄を宮内附

せ〳〵ゑ毎年花の時垣めらし富ませ

ち是一世より稼事なりふ勇ゑなりあり

より余理庄を花垣庄といふ 上東門院を

一条帝の后ゑ

一 同 あ〳〵地集

後月下ふ彩 櫻をかあり

はるの八花とさ〳〵る菓の一瓶と云初打の

花より力を添へ櫻をあしらはるるのゑ

菖蒲根志ゐこ義の二寸閑よ八月の庚子ゆ
あしらひなり

一 問句の死活といふものを迎いをしへ分ワ能ゆ
菖死活ををくいこて理屈ゆ死句こ或人菖蒲よ
此句をゐんせしこの

刈株て菖蒲ハ水の源こゐ
角云ゐ死句なり驚れ源こゐ和とせゐ此と
年を添けるよしこ此活ゐよ脈こるゆをこゐる
ゐしやり水の源こゐ事なゐ驚の一字ゆ

楽を身こ理屈をぬ化こるあり句ハ楽くと
古人の教られさハ正論理屈をぬけよこてハ
人情理屈地獄を出ゐ出ぬゐ方仮こ
師云いけるや嵐言葉の百顔ゐけゐよ其堂こ
いへるおのこ

十五の弱あゐ陽ゐ七歩下
といふ句を伺こやゐいふお句よ附付しを嵐雪
言葉小しゐ上ゆ文字を弱こゐ弱こあを
さゐゐ其堂波巻勝ありしゐ泪を流して

是程まで評者と作者のんさ後かハまるものこの
十五の時さかさを我こゝろとうやうれ初めもの
うしとて速流よりいとく懐紙を引裂き筆
墨を見る事ありし時分をとても世話かとろ
ゝちや
毋又日吏山入東平舎を携ふて毬戸外詩板
向うの所用あり毋年雑談師云小袖の模様
をとるも田舎向故むさとしふうあるなり白と
赤のしゝく何かと面白ても田舎むさうあるものこ

故の人ゝ云ても田舎向うあ田舎人よ又故向ゝ
ゑなり先師の池場の立花見る河去よ田舎の風流
故の田吏立て見るあり居くこうるありと去て
何よりゝ見ゝ志ゝ所ゝ小ゝ小ゝ所ゝ
一月二百小茶沢の居よ師一宿吏毛吏風柳
入東京の紙まて到る
かゝ紙紙 ゝり 女房の嗅
張ゝ見ても和尚の伝よ別法りり
師ゝ分あり人ゝ感ゝ師云昔の奥徳家用

沈の附句ハ

人〻奇合笑止なるべし

梶原う逆鱠の事に相駭

しかるに表〻紙〻ものの事り芭蕉流ハ紙句の

塩梅を見ぬいて句を案ずるして別のものを

ものに附るくうりべ事附ぬ事うくん裏ま付

なりとうく句ハ句を見るう事一こ句う

晴けるに我発句を見るものこ句れ事へぬ

時に前句の作者ま句を事うよ沈なり

一蕉翁門附句ハどこ〻くといふ中ま沈句を

ちゆ〻ぬものを附ハ一巻の柱立こ客発句亭主

発句ハ沈と沈ハ一巻の柱立こ客発句亭主

沈といふ事俳諧師の事法ちゆ〻しを知

人稀なり発句を発れこ〻ま可しらず

ふる事ハ沈ハ一先師秘義の事こ

市中ま掛れ丹ひや裏乃月

あり〻〻と門〻の声

市中ま掛れ句ひま異の一字連綿也

同日つゝ謙釈浮世

一 養同 積養の中より

何のもの云のうちハ静かなり

星見て初て年の貌ふく

言元ハ大器より入山伏の年北日より業能をいふ

沙あり元元の修法て年の波より沙絵てて上山

ちるちりより月て星見て初て年と年と越年

又山家ちて少て宋州越て上能より居る人に城

重服より時も貌を吹て元も年の貌て前て

ちるも亦年の貌こそ吹川なる

知川はあるをつきあり

とて親行長の名はある養ハ胥のるるて

一 吏毛同

吸物を先てうれて去いせん

いう

言紀後玉ハ名居るより水泉漣清ハ若世ハて

一 同同盧仝ちものこいう

言唐の詩人て茶紙をする人て見ホる意

亟今と見るハあしらちり冬の日の中ゝ

日京の李白ゝ場ゝ身を見て

とりゝ白と同るすくあ　そゝめよいて酒好ゝ詩

ゝと作る人を李白くゝたりゝ五ゝいゝやゝかあ

ちゝ亟金の名ハちゝとかりて只茶人ゝ隠者と

見てゝ亟ゝゝ紀を俳諧の虚実といふて茶

白を実ゝさゝけハい河の流れ人ちゝの須日さん

ものちゝのゝ江稱を漢やゝゝ旅ちゝさゝゝて

奇峯妓ちゝものやゝゝゝあるハ又あしゝちり

一蓼問

疲れのまゝ記するちゝゝ記

蘇をとりてくゝる法　引ゝむ

若芝ハ夕日の影の俤さゝゝちり

糟蕎麦之

二毒茶とゝゝも果さん穂ゝ出て

この法の板行二毒茶の上ゝちゝゝ一毒茶と

ゝあるちり二毒茶てちけ見て穂ゝ出るの論法

二の字ハ亟しゝて亟ゝゝ紀ちり

一 紫式部

雲雀吟小田より出て出たかと
はや二出たかと人のいふを
聞たよあれは何出たかと
出たかとやとすゝきややうり出たかとやなり

同集

稲の葉乃乙はちうゝなれ風
爰心はたゝめよ越る新屋山
師云歌は師世をそむき始て新屋山越る時

新屋山深世をそよふり捨ていくよ踏分我身かなしん
野を横切るひきむけよ附る
思ふ人雲井なる孫ハ新公弱年むけてたゝふ声哉
水無月や朝ハあれとも陰 緑
三月や春う情よあひそめてうくてふ朝ハ今もみどり
ふへゝく古家元の白ハ加ゝこゝかさいてハ古寄の糟粕よ
成なり

一 同 猿之の

廣沢やひとりたゝる沼古郎

若草しらひもも流悪ともいふなり

一 養問

人もこすまし　あるそふれる

若古き井をこの久しく汲ばあるよハさしひのうく

らのあり代白あるそふと濃うよ紅く赤濃く

毎こそ附白よ嘘つきよ自慢いそせく拵ふんとを

一 問

脂あり和よるものなし　赤柏

代白霜月朔旦と何年ぞ或出る霜月朔日

小野の神へ供御絵る時用ひ也葉ハ赤柏用ひ

ぬ

若志ゝなり赤柏ハ七柏の一種と又あるゝ柏も

ゝ

玉柏　あゝ柏　白ゝ柏　いそと柏　むゝ柏

ゝ川柏　あさ柏

只あゝ柏といふハ秋く深の末れ紅葉をいふ

一 此柳問猶この

乃濃や花ハその代を嵐の風

けやいう

菩伽の事もなく名和のやと須弥山と

乃ゑるとなり

三月八日茶会入来は伝のいさ法さ枝をて自剤と

鉢をとこてろと法てろと抽枝あり

一 茶同　冬の日善阪の銀

たてやとぎるる笠の山茶花

はなのとぎるるふぐりいう

菩利（トハ元元）花なり雅やと笠を取るる白と竹舟

仰るる式といふ川里とそうるるとハ口のうち

むかうとぎるるとと煙ゑをあり

一 同　何ゑ変色ゑ

多摩の離魂は郷乃おそろしき

はるとやういう

菩離魂ハ郷の郷と離（カケ）魂の頻（ヒンキ）乃おそろしき

ゑむなりたゑ郷ゑ

はきのいるもゑ源と古今は序ゑもいう

あるなり

一同

さるくつやこ四郎を記する張子人

若さきさきさい橋なり二郎八剃髪してうく

より目の無りてるをまきしいふこむに拔こ

山廣ハむくる為りこ紀さのこつをよりをる変つ白して

一同

さ姫姫やぶうしんの面いうかくこ八

若ふうしを能の面こ廣こおりてこ井る相陰

おこくこるげ能ふ八能ふく居くし

白こ八紙保姫のおりてをふうしの面よおりひや体

白なりよ紀如れかしをめるを若こ拔かりの

一同曙理負ふの序よ佐川田教ひ若あり

永年家ひ居こ若ふいく

若こふりり地下の孫人なり

一同よ山教かくの奇いく

若

よしの山義法の教かくんまる若のこを

教ひの若るい奇なり

小倉山ちかき所の新なくさの小屋さ家ゆかしきもの

色ちかき所ゆかしくゆかしきもの

一同　同集

桶のうつわを入たるひ　ゆかし

若草を結ぶいふ箱竹と桶の箱を入たるもゆかし

いつくしきもの　引出をかけたるもの

ちり縁のもの　小縁ゆかしきもの

一同　同集

鏡　ゆかしきもの　ちり縁ゆかしきもの

けしの字いろ

若おとなしくハ撥（カンキ）の半遠ゆかしいろ

半ちり撥の姫の結ぶ紙をゆかしき角乃造

せんしややらん今ゆかしきもの　大さ廻

ゆかしの板に結をすげて大名のようなるもの

裏に打を手てちりゆかしきもの

一同　同集

三月十五日

一同　同集

曙覽や苗代の時の角大師

蓑笠を田舎ゑくぼ苗代のすゑ一ぱいに

やうふ札を作成を縄よりきむく門口や牛を

めつまつ初財布といふる社姿なり

師云今財の白いひうけを云歟と変せさうる

かゝいやゝ前をとはをの川うゝ毎ぶを勇と

をたゝり

かゝりうゝ始け初る歯や秋の風

蓑のゑりきをの川うゝなり

又たゝひ出言の川社船鵜

又たゝひすて海そ居るなり出言はをの川

うゝなりきよかるふなり

一

蓑問　蓑俵集附合

屋の下ゝ法いうゝ流る

蓑之社梅津うゝ社記蓑

海の梅津桂ゝや

蓑そ是ゝり紀家本記ゑ

まゝるや白ひきゝゝゝり峡蓑の梅津の望乃曙蓑

秋もすでに過ぎ月の桂川渡るを素八こゝに
見ていまさらのちり

一同

廉のふもとなる所に硯北形恒敬

岩硯に形恒敬忠答形といふをこゝ

一同　巖僊

素や桂川丹波の廉も過るこゝ

はしの句不夢は

岩見八年家相続ゝ義絶記よんでこゝのちり

一の谷北西ゝ見ゝ丹波山乃廉海者よ者こゝ

多北西八山塊の端ゝ山ゝ海ゝ海素八一陽寺

暖寺を出ゝ丹波へ向ゝ海ゝ素ゝ海ゝ連

こゝ廉ゝ山中ゝ入ゝあゝ海ゝ海ゝ

三月十九日

乃々屋ゝ高ゝ素芭蕉義の素跡一畝拾条

師一流一波乃ゝ入ゝ素ゝ蓉ゝ海ゝ見ゝ海ゝ田の沢ゝ重

板用方一の半鐘なゝり端半ゝ帝ゝ合一板の

白家を知ゝ海ゝ見ゝ素ゝ海ゝ地蔵

此俳諧入ハ師歌息して古人の骨をしりしる
見るへし是ハ炭俵集出板れ比義旅立せる
る序文ニあるてそ附の文画之千里ニ
うちけし七文字を棄しらるゝと見えさ洄の
義あるなり
三月廿五日予松嶋行餞別の會東村氏ニて
與行師出座
餞　奥細道　内墨紙　活夜
此外連中詩前発句略し

蒼き未て中々松嶋行餞別の句を見ん世中
蔓草の露や志のふれ草鞋すれ　蒼き
師発句ひらかし面白さ手つよく萩の花すり
志のふ摺といふ物を草鞋摺とハ一段俳諧の適
なり
見ぬ素をこゝ迄ありくゝ郭公　芭蕉
世の中八三日見ぬ間よ桜かな　仝
年々此句を見ん世中きえ桜れ方よろし世の中れ
五文字所りゆるその是ハ可なり

小石川沢の露ハ白玉を乗せるよりハよりいとく頃日
這間のうち風の雅を学て見やしさう一時不出
来ちらしちとく自傍の不もあるとて見せるふく

海風雅

二星おなじ比ろ歌のさやうなるふうこの
ちらん言葉を指よりも心よりそへたるよう結
ものこれ風おこうり面をなふりて清き光を
うりこそ稀なる紀望ようこの歌ハ詠ハ
いきほひ神ものもも一歌の理ふるもうち

そこ孫白ひうもてあそ後し神遠
神後の名をよりひ我堂の光ハ後
朝よこそ菓戸ハ目沼よりこ後紙帷
苦しひ歌若之清きるハ去移り水智る
ちとひをつふ風去ようしてくの
名を唱ふうう梅橋ようこ柳ふかもを
ちるる紀ようくよ暗しとおりとも去る
人のこれいひうう清きハの月濁るハ澄て
ようなの風ちくして文教化のを力ハ貴ん

夏の夕ぐれ

乃ぐちより上無房の袖くちのうみむね
かこちびおりふ男よすがおしむと風年
まつのするいとゆうゆう微風八輝よ涼亦
せうまて詩ふ乙女の姿ちらちらとめ
ようとうふひ紅の書をを簾をかゝんと
するやかすゝおゝ海う地情秋船よゝ
旬よ蒼る云紫ふちゝゝて筆をれ下ゝころ

四時風月帖定連

葉ぬ紅や霞のねゝ分ふけ　天府
仍春や情ゝてそゝてそゝう　婆心
蛍ゝ見えて仏界の色さうれ　秋風
知ゝ筆ゝ帆よちゝ色ゝう金霞　錦衣

多ゝうけて見ゝ月ゝ春の宮　百貢
葉の夢や初よたゝゝ落月秋　乳峰
立見ゝて乃あ世ゝ生の声　松濤

下戸ぞうり花の屋て添ふ蛍　盤中
雨の降れ離れ牛　荒ら蛙　君　如風
夕蘇や寺門をの浦よ駆も蓼も　慎車
何ものうらぶ日なり花の雲　富屋
ふ所て曲輪出ふり冬の月　風扁
蔵波牛蟬ゝて鯉のそく海　黙我
翌ふかまて蓼出ふる紙帷れ　逸賀
山橋一時牛咲そうふみ乱　鬼秀
竜食の二日ゝなり出素門　夜光

帰りあふゝ廊つう和花さうり　夜格
蛍や毎て世少日ゝ雲ふふ　雪成
世の中ゝ色ふる家のおふふ　子交
二月れあふひ住す中番おろし　乗求
蝶ゝふ花ゝ花ふさうて糸さふ　花口
ひふふ和おふ屋や川橋　長羽
綿木や朽ふ雲の和もすふ　吐江
花雲をおり人て淋し炭の枝　岡牛
ふふて三蓼船ふ物ふ雲さふ　風足

凡好の凡すも碎てまくり加南　蘭泣
新たゝぬる達磨人男七夕　尚美
立たてたる赤しゝ川や略の声　度中
鶏考ひれ紅とハ凡そ盃の月　我龍
名月や武蔵川手巻てゆく　拙石
大字手巻とハ凡そて巻荷　子之
入おを之身　手れ森さめこれ　嵐大
仲をしくたる後巨燈うか　子牛
立ちはたあちゝ向ふ蜜蜂　鷺川

傾城の漬たしめて和一夜新　祇卜
久ふれ所とたを和為雲雀　玉斧
子茅の花ものいく秋立ぬ　呂泉
郭公一声　茅れ告地ゝ鶏　琴聳
茅所れたとよ見る小鮎　竹條
一身ハ文手　紀元也如ゝ　美人
うこう世とれたの為ちゝ初氷　稲牛
白魚の為ちゝや巻ようしれ　言陳
たゝきたよとハ凡そて巻うか　貢面

志川うさや橋よりの新ゐし　牛象
延叔や夏の浮橋かうてまく　豊扇
六の一首さとり出しる大演式　一得
鄭公浪多羽まてもえうや　蓼房
川猪や小猪この濤ま六七歩　兎州
しうしう叔や仏ゐてもふうて　流圃
春の糸そうて紙うとびひう　深松
じうこや蘭燭は寒を庵の蓑　大牛
義蓋さ女ちうるかきりる　東蜀

西ちよ居て松の紅葉より冬　舎蘭
雪やうふ世ちゐれ日より山　之思
杜若白さもうあのゆうるれ　言義
葉の花や町より俳ゐ堂ゐ川　鶏喬
歩あけぬ意こそよけ来窺紅　雪鹿
ゐき俳の初くりゐ疲れ稜の紅　五蘭
夕新れ花乃せてうる扇ゐうか　時中
かつうきの仲八蝶ゐしうの身　曲川
我紙とちうきれて花う秋の雲　意三

さゝくし富士八幡なり初附句

大佛のみくしてゝく暑うか　大坂　回國

世ふかうつゝる川蓮の花　下総　臙江

ふる川茶て灯をけて雲の見ひ　生駒　投茶

還棚や月よりくの茶れ家　武州　坂京

京入の板天神やあさめし

花うゝ笑ふ山の移る時　川西　蓮戸

佛道の這入口なりちるさゝ　越後古ノ元　湖堂

姫百見よ梅も桜も花　入江　茶汁

下総　巴蕉

巴水

声降も今そ年月乃鶴云　武州　和文

日のうちもあたゝく門ありの月夜　下総　玉峰

活うちよ七箇の蛍を拾ひうり　三河　蓑主

もの捨る木れ落樹　其附句

只ゝ山あ氷室ゝ　菊平

表ゝ表ゝ出うり蓑乃身　武州　菖蹊

初陰の多年ゝ蔵てや蛇蝋　瓦ノ好　土峰

人ゝ人ゝそ花の山　紫山　宜来

かゝる日よ天晴花のちるよ　人尼
まこうあり偽なりとは此古歌也　周竹
雪ふる山中　秋のちゝ月　鰹古
夜うの里あり　けなり　鄙庵　吐月
鞍屋の財ちう　新やこの梅　連文
身をくゝる　氷の柱　青面
人、蕊て　仏の暁　加よう　魚没
氷船と　一時　春の風　山幸
身あうと思ふ　歌ちう　猛　文兼

蘭は菓子ハ佛に供ぜ寺　梅鼎
成佛の指ゆらん花さうり　蓼太

文政七甲申年霜月生る
長松舞ゝ二下屋　行者稜
いとゝ白

如陽下東所ゝ住
雪川氏